

アンチバイオグラム作成に工夫

Web 用い簡略化

第11回日本医薬品情報学会が、6の両日、都内で開催された。この中で大阪大谷大学薬学部の初田泰敏氏は、Webアプリケーションを使ったアンチバイオグラムの作成やフォトサイズ、明暗の階調を変化させて、情報の視認性を向上させる試みなどを紹介した。通常の院内の情報提供

大 阪
大 谷
大 初田氏が紹介



初田氏の講演が注目された

医薬品情報学会

では、多様なデータや関連情報が一覽できるような仕組みが導入されているが、従来の情報提供システムでは、重要度に応じた見せ方にまで配慮されていることは少なく、初田氏の取り組みは、費用をかけずに作成しつづも、利用価値を高める情報提供に向けた試みとして注目された。

多くの医療施設で、細菌の抗菌剤に対する感受性を一覽で示すアンチバイオグラムが作成され、感染症の治療および予防に活用されている。しかし、抗菌剤と細菌との組み合わせをマトリクス形式で一覽表示する場合、組み合わせを考慮することが必須であり、作成に手間がかかるほか、出来上がった一覽表は視認性に欠ける場合が多い。

初田氏が高の原中央病院

れる薬剤感受性データ(S...感受性、I...中間、R...耐性)に基づいて、自施設のアンチバイオグラムを自動的に作成できる。その設計に際しては検体の種別、抗菌剤のグループ、細菌の分類、データの機関などを閲覧者が自由に指定できるように配慮されている。特に視認性については、途中の試行錯誤も含めて紹介されたが、見かけの数値に捕らわれないよう、検体数や感受性率を基に、フォントサイズや明暗の階調を変化させ、高い視認性を発揮する表示が可能となっている。

オープンソースソフトウェアを利用しており、初田氏は「費用もかずに作成でき、クライアント側にWebブラウザ以外は特別なソフトウェアを必要としないため、LANのある施設で利用価値が高い」と指摘した。院内LANで見られるため、外来での利用も多いなど、現場での利用性も高いという。

同システムの構築により、薬剤感受性データをWebサーバーにアップロードするだけで、最新データに基づくアンチバイオグラムを作成できるため、従来のように、薬剤師がデータベースソフトウェアやエクセルを利用して作成するのに比べ、業務量が大幅に軽減され、通例は年に1〜2回にとどまっていた更新が、毎月更新できる状況を作り出した。

このような取り組みは、一般的な情報提供の枠を超え、臨床に即し、かつ一歩踏み込んだ薬剤師側の積極的な情報提供を支援するツールとして、活用が期待される。

との共同で作成したアンチバイオグラムは、作成時の作業量を軽減すると同時に、フォトサイズや明暗の階調を使うことで、一覽性を向上させたもの。専用Webアプリケーションを自作し、院内LANで運用されている。

WebサーバーにApache、データベースにMySQL、プロログラミング言語にはPHPを用いた。これにより、抗生物質感受性試験を委託している臨床検査会社から、1カ月ごとにまとめてフィードバックさ

る。院内LANで見られるため、外来での利用も多いなど、現場での利用性も高いという。

同システムの構築により、薬剤感受性データをWebサーバーにアップロードするだけで、最新データに基づくアンチバイオグラムを作成できるため、従来のように、薬剤師がデータベースソフトウェアやエクセルを利用して作成するのに比べ、業務量が大幅に軽減され、通例は年に1〜2回にとどまっていた更新が、毎月更新できる状況を作り出した。

このような取り組みは、一般的な情報提供の枠を超え、臨床に即し、かつ一歩踏み込んだ薬剤師側の積極的な情報提供を支援するツールとして、活用が期待される。